社会保障こぼれ話

インフレと年金基金

（スウェーデン）

スウェーデンの労働組合総同盟（LO）の資料によれば，この国の年金制度の基金は，1970年代の過去6年間にインフレにより約360億クローネを損失した。

改革された新年金制度が1960年代に実施された当時，経済は拡大を続けると考えられていた。また，年金基金の蓄積により，基金を通じて生産に必要な投資が行われ，その見返りとして，成長をさらに推進する基盤ができると考えられた。1960年代には，すべてが好調であった。しかし，1970年代には，状況は根底から悪化した。現在，年金基金からの貸付金は，政府が外国から借りた各資金の利子を支払う一助に用いられている。1974年以後だけでも，この傾向が顕著である。

1960年代には，1965年だけはインフレが年金基金からの貸付金に生じた利子を帳消しにしてしまった。この年代の他年では，いずれの年もインフレの影響が小さく，利子分が残った。しかし，1970年代では，インフレが年金基金の配当で相殺されたのは2年だけであった。

経済はゼロ成長の脅威に曝されているのに，インフレはかなり高い。この傾向が今後も続くならば，年金基金の均衡は高い拠出で維持できるだけになるだろう。また，インフレが年金基金の価値を低下させるので，勤労者は年金が高くなるだろうという期待を，放棄せざるを得ないだろう。

LO (Sverige), News of LO, No. 2.
March 1980, pp, 10～11.

（社会保障研究所　平石長久）

編集後記

今年もまた桜の季節になった。長くきびしい冬をすごした枝に，蕾がふくらむのを毎日ながめながら，花の開くのを待っていた。しかし，桜は花が開いたかと思うと，風に舞いながらすぐ散ってしまう。花の散りぎわのよいので，昔の武士は桜を賞で，首が地面に落ちる椿をよしとしなかった。人も花も散りぎわのあっさりしているのがよい。

もっとも，冬山の雪と氷の季節にじっと耐え抜いて，花の季節を迎え，そして，あっという間に散ってゆくのである。　（平石）

海外社会保障情報　NO. 49

昭和55年3月25日発行

編集兼発行人　社会保障研究所

☎100東京都千代田区霞が関3－3－4
電話03（580）2511

製作所　和光企画出版株式会社03(564) 0918